

第74回長野県美術教育研究大会 下伊那大会 講演
演題：「今、図画工作科・美術科の教育で大切にしたいこと」
講師

群馬大学共同教育学部 教授 林 耕史 先生

お招きいただき、ありがとうございます。下伊那に戻ってきて、今朝の霧の中、故郷での霧を久しぶりに味わいました。本当にしっとりとしたミスト、そして冷たさ。それが、だんだん晴れてくると青空が見える。それから色づいて輝く柿の実とか、秋の色づいた葉が見えてきて、そしてアルプスが望める。この景色は私の中では原風景です。

今日は、あまり役に立たない話になってしまうことを先にお断りしておきますが、今、自分が考えていることを精いっぱいお伝えしようと思って参りましたので、どうぞお聞きいただきたいと思います。

まず、近況報告です。私は、美術教育と彫刻制作を並行して続けています。2020年の夏に東京豊洲に新しくオープンした三井ガーデンホテル豊洲ベイサイドクロスに、作品が入りました（写真1）。楠の丸太をチェーンソーで縦引きして、5枚の厚さ10センチほどの板状にして、それを組み合わせてつくった、舟をモチーフにした作品です。写真で



写真 2

みています。

鑑賞者は、彫刻の前で見てくださる。だんだん分かってくると、周りをぐるぐる回って見てくださいますが、彫刻の中に入るといった感覚にはなかなかないと思います。こういう集合体になると、鑑賞する方々は、この間を歩いて、振り返ったり、また違う角度で見たりしてくださる。すると、景色がどんどん変わる。森の中に入っていったら、その彫刻を森を味わうような感覚で見ると言うのでしょうか、それをうんと試したいと思って今取り組んでいます。

2019年は、群馬県桐生市にある「有鄰館」という古い酒蔵などが保存されている文化財で個展を行いました。おそらく江戸時代終わりごろにつくられた酒蔵で、土壁と太い柱が醸している空間で、その中に作品を配置するというものです。これで一つの作品です（写真3）。

そして、彫刻を展示するだけではなくて、そこでさまざまなコラボレーションを行っています。例えばライブセッションです。弦楽四重奏団とクラリネット奏者に、モーツァルトのクラリネット五重奏曲を演奏してもらいました。この彫刻の間に立って演奏してもらおう。演奏者も自分の体を移動させながら立って演奏しています。お

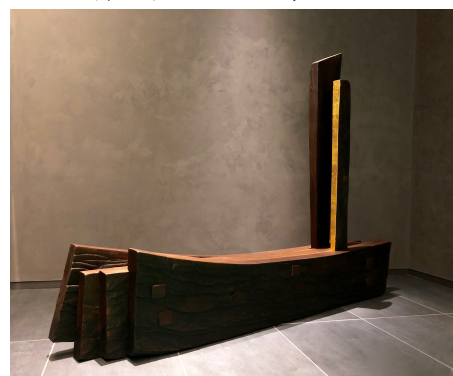
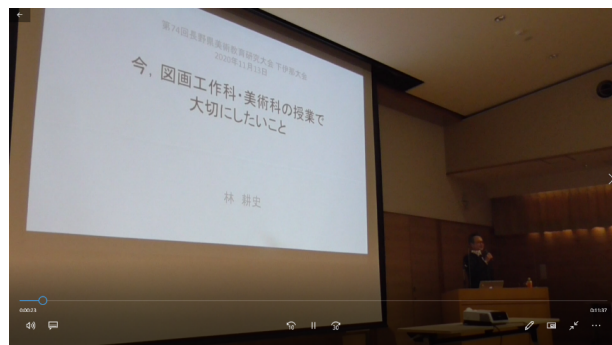


写真 1

は4枚のように見えますが、そこに2つの帆が立っています。上のほうに、とがって見えますが、月が宿しているところに金箔が押してあります。その光を受けて右側の帆が、すうっと光を舟まで届けていくという、そういう作品になっています。

このように、月と舟と、そして、これから見ていただきますが、山も、モチーフにしています。「月が眠る山」というテーマで、2019年には、個展を3回開きました。ほかにも展覧会にいろいろ出品しましたが、画廊で展示した作品や、高崎市のギャラリーで展示したもの（写真2）など、こうやって複数の集合体のかたちで空間を構成する彫刻制作を試



写真 3



写真 4

客さまにも好評でした（写真4）。

また、前橋在住のコンテンポラリー・ダンサーからこの会場で踊りたいと提案があって、パフォーマンスしてもらったイベントもありました。演劇やダンスをされてこられた方はすぐに分かると思いますが、踊る空間に物があると、そのセットや大道具など置かれてある物と、踊る人、演技する人って刺激し合いますね。もし、ここに私の彫刻が立っていたら、こうやって舞っている人は、この彫刻を意識して、ここで体の動きが変わる。こういうことを考えていくと、彫刻を鑑賞することも、そうやって体を通して表現している人を見るのも、彫刻の鑑賞にもなるということを感じました。こうしてコラボレーションも進めて、彫刻制作に取り組んでいるところです。



写真 5

2019 年は、アメリカに行く機会も得られ、コロラド州にあるアダムズ州立大学で、アーティスト・イン・レジデンス、アーティストが行って滞在して、そこで制作をするというプログラムに招かれました。現地の木ですので、大きな木が手に入りました。私の身長よりはるかに高いような太い木、これも丸太から、またチェーンソーで切り出して柱状の山にしました。表面に塗装をし、バーナーで焼くと、また肌合いが変わってくるのですが、そこに金箔をして作品にしました。この材木には非常に大きな割れが入っていて、たぶん、材としては低質なものだったと思います。この裂け目に金箔を押したので、この傷がまた効果的だったかなと思います。こうして個展を行いました。ここには美術学部と音楽学部があり、音楽学部の学生さんや、教員、教官が、この中で演奏すると、先ほどの有鄰館を大規模にしたようなコラボレーションができました（写真5）。混声合唱団は、この作品の周り、間を歩きながら歌を歌うということをしてくれました。さながらオペラと言いますか、何か音楽劇を見ているような感覚になりました。

こうして、2020 年になりました。春には前橋で大きな展覧会があり、そこにキー・スペースをいただいて展示をしました。『月が眠る山 2020- I MAEBASHI』というタイトルです（写真6）。同時に、『2020-II』は市内の画廊で展示しました。なかなか 2020 年も面白いぞと思っていたら、世界地図がだんだん変わってきてしまったんですね、COVID-19 ですか。3 月 13 日に、前橋市、それから展覧会実行委員会が、会期の途中だけでも展覧会を中止しようと決定し、展覧会が終わってしまいました。



写真 6

それから作品を引き上げる段になって、アーティストの中から声が上がり、これで引き上げてしまうのでは何もしないことと同じだと。前橋市の市立の美術館は、昔のデパートを改装してリノベーションして美術館になったので、1 階の道路に面したところがガラス張りなんですね。そのガラスの内側に作品を、展示ではないです、置くということをやりました。これは理屈っぽく聞こえるかもしれませんが、展示は、展覧会の単なる延長ということになる。そうではなくて、梱包しかけのものをそのまま置いているとか。あるいは私は、さっきのたくさんあるものの中から 10 本ほどチョイスして、それをまた、そこに点在させるとか。何か、「終わってしまったから、仕方なく、こっちに仮展示しています」ではなくて、コロナによる中断に抗して新たなものをここでつくろうというような気持ちがあったのです。これは、5 月まで継続されました。

この先どうなるのか、不安は尽きません。こんな中でも、今日は、こうやって研究大会が行われたと、これは、先生方、地元の方々、子どもたち、保護者、みんなの理解があって、ここまでできたのだと思います。ということは、何か、まだこれから可能性があると思います。大変なご苦労があったはずですが、それをおくびにも出さずに、こうやって来てくださっていることに、本当に可能性を感じるというのが私の率直なところです。

では、この国難にどう臨んだらいいのかということを考えたいと思います。「厄災」、あるいは「災厄」とか、こういうことは今までもあったわけです。太平洋戦争。あるいは、まだ我々の記憶に生々しい東日本大震災に代表されるような大きな震災などの自然災害。2019年には、長野県でも大変な風水害がありました。

戦争、これは平和教育で皆さんが学校でも大事に教えていらっしゃると思います。今日ここに座っておられる方々は、太平洋戦争を体験されていないですね。災害では、東日本大震災がありました。その前にも、阪神・淡路大震災もありました。実際にその場にいた、そこに住んでいた方は、たぶんこの会場にはいらっしゃらないと思います。ですから、我々が大事に伝えよう、教育の場でも大事に取り上げて子どもたちに伝えようとしている、戦争とか、震災、自然災害について、実はあまり実感、共有できていないのではないかと感じていました。だって、知らないんだもの。経験してないもの。「経験してない」という言い方は、適切ではないと思いますが、仮に「経験」と表現しています。

でも、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は、全世界の人が、全人類が、今、リアルタイムで、同時進行で経験しなければならない、言い方を変えると、共有している厄災である。ここに、新しいものが生まれそうな気がするのです。対岸の火事とか、「大変だったね」という人ごとではなくて、まさに自分たちの出来事であるということは、同時に、同じ苦しみを同じ時間に皆が味わっているということです。これは教育のみならず社会全体に大きな影響があるだろうと思います。

このときに、「今年は、コロナで教育は大変だな」「社会は大変だな」「経済格差が…」とか、いろいろと話は出てきていますが、これは、我々のように何十年も生きて過去を知っている者の言葉だと思うのです。でも、どうでしょうか。幼稚園や保育所の小さい子どもたちは、昔のことを知らないから、今のことを「当たり前」と思っているなんていうことはないでしょうか。いいとか悪いではなくて、大人があたふたしているのに比べると、子どもたちの受け止めって、「うん？ 何か違うの？」ぐらいのこととと思っている、そういう小さい子どもたちがいるかもしれません。

私の言っていることは気楽に聞こえてしまうかもしれません。中学3年生は、2年の秋から、県内でもいろいろなことがあって、活躍できる場を失ってしまった。それから、修学旅行に行けない、文化祭もいろいろと制約がある。そういう学年の生徒さんたちには非常にづらい思いをさせてしまっている。だけれども、3歳、4歳の子どもたち、幼稚園で遊ぶ子どもたちって、もしかしたら、こういった状況をすごくドライに、ちょっと、ふんわりと受け止めているのかもしれないと、そこに期待もするのです。過去をまだ持っていない子どもたち。我々は、今までこうだった、それができない、大変だ、というふうに、ずっとつながって考えます。でも、今までのことを知らない子どもたちには、これからやることは、全部、新しいことだと。これって、あまり悪いことではないんじゃないかなというふうに思うこともあるのです。皆さんは、どうお感じになるでしょうか。

これはまた後でも触れますが、「触れます」と言いながら「触れない」という話題ですけれども。「触れない」を求める生活や社会が、これから本当に求められるのか。求めないといけないのか。あるいは、求めることで、どんな影響が出てくるのか。そういうことをとても考えなければいけないと思います。考えなきゃいけないというのはネガティブな言い方になりますね。

今日は、何をお話しするのが一番いいのだろうかと考えたときに、今から9年前、この県大会の塩筑・木曽大会に講師として呼んでいただいたその場でお話したことが、ここでも、やはり大事なことだなと思うんです。あのときの私の一番の中心は、東日本大震災、3・11を経験してしまった年の、じゃあ図工・美術は、ということでした。

どんな被害があったんだろう、ここで人々はどんな思いでいるのか、どんな境遇なのかという、私の想像力は、もう全く追いつかないという自分に愕然としたのを覚えています。これは、でも、私たちに大きな視点の変換を求めてきました。

例えば、「失敗学」の話もその場で申し上げました、畑村（洋太郎）さんの考え方です。『想定外』という言葉は免罪符にならない。」と述べ『中央公論』（2011年7月号）の中で、「小中学校での教え方を変える必要がある」という話をしています。「自分の目で見る。自分の頭で考える。自分で決める。それに従って自分で行動する。そういう子どもを育てる教育が必要なのである」という提案を畑村さんはしていて、私も、この研究大会で引用しました。これはすぐに、図画工作や美術だったら担えるぞと思ったものでした。

その後、社会はどうなっているのでしょうか。その時の講演で、「コンピューターを動かすソフトのほうではなくて、OSとしての美術教育を」という話をして、ぜひ美術の先生方に、そのOSになりましょうという話をし

ました。そして、どういう力や、どういう姿勢を持った教師だったらよいのかということで、美術の先生方は「～しよう」という駆動力を持っている。学校の中で、職場で、その駆動力を反映させましょう。そして、何とか動き続けようとしましょうと。

また、その講演の中で、「分からない」ということを楽しめる思考回路を持ちましょうという話もしました。我々は、分からないということのを忌避する傾向がありますね。学校教育は、分かるようにするんだと。これは一つの正解ですけども。でも、分からないということのを楽しめることが駆動力になるのではないのかなと思います。

私は、最後に東京の小学校にいたのですが、その場で目指していた子どもの姿が、「先生、今日の授業は分かんなくて面白かったね」というふうに子どもに言ってもらえるようにすることでした。分からないのを楽しめるって、どうしてこんなに次へのエネルギーになるのかなと思うわけです。そういう子どもたちにしていけば、「分からない」「難しい」「困った」という場面が、今度は、自分のとても「楽しい」場面に変わるという。ちょっとこじつけかもしれませんが、そういう気持ちが大事なかなと思っています。

「正面を疑う」という姿勢、「想像力というエネルギー」、これを持ちたいという話をしました。そうしていくことによって、変な日本語ですが、「想定外」とか「そうでない」ということではない世界へ考え方を発展できたらいいなと思うのです。

そして、図工・美術で願う子どもの姿を提案して講演を終わったのだと思います。どういう姿の子どもたちを育てたらいいのか。意思決定の表出ができる子どもにしましょう。今日の松川の小中学校の児童・生徒の皆さんには大いにこの姿が出ていました。そして、自分で価値や意味をつくり出していく姿を目指す、こういう子どもにしましょうと。松川北小の授業は、ズバリ、これが目標でしたね。そして、下伊那での研究も、これに基づいているわけです。「自分っていいな」と、こういうことが言えないと駄目だと思うんです。「俺が、こういうふうに付けたんだ」「私は、これがいいと思う」、そういうふうに、ぼつと言える子どもたちですね。そして、様々なこと・ものの、よさや美しさを感じ取る。こういうことができるようにしたいなという話をしました。

さらに、共生、共創。子どもたちが、生徒の皆さんが、自分で友達に語り掛け、あるいは、友達が手を貸していました。「ひもひもワールド」なんてそうでしたね。そんな姿が自然に出ていました。こういう姿を見せてくれる子どもに育てたいなと思います。

大学では、学生に、図画工作や美術で目指す姿というのは、このように自分で筋道をつけ、試行錯誤しながら自分の方法でやっていく、それが自己実現になっていくんだという話をします。「自己実現」と言っても、たいそうなことではないです。「今日のこのところ、彫刻刀で彫ったところを白く埋めた、これは気に入ったよ」ということでよいのです。今日の授業がそうでした。45分あるいは50分の授業の中で、ほんの一つでもいいので、プチ自己実現があれば、それが1年通せば30回、45回分に重なるということです。それを6年間・3年間、繰り返していけば、子どもたちの中に、きっと、こういう姿が重なっていくだろうと。これを私たちは目指していたらいいのではないのでしょうか、という話をしたのを覚えています。

2020年の今、このごろは「翻訳」と「問い直す」ということを考えています。

子どもたちは、現状をどう眺めているのだろうか。大人の視野、大人の考え方で、現状を捉えてしまい過ぎないようにしたいなと。子どもたちはどういうふうに感じているのか、子どもたちからはどう見えているのか、その視点についても心得ていたいなと思います。

では、「問い直す」ということをしてみたいと思います。例えば、「上手」「うまい」という言葉、これはいいですね。でも、これでいいのかというと・・・。

会場A：そうでなくてもいいのか。

林：どうして？

会場A：そういう中にも、悩みがあるのか、次に何かしようと思うか。

林：うまくなくても、悩みがあつて、次に何かしようとするか。いいですね。

会場B：図工とかを見ると、うまい、下手で区別するものじゃないなというのは常々思っているので・・・。

林：じゃあ・・・。

会場B：・・・尺度で見るというのは違うんじゃないかなという・・・。

林：「尺度」というお話をしてくださいましたが、そうですね。うまいとか下手というのは一つの尺度に過ぎません。そこに、もっと違う尺度が我々の中に入ってくるといいですね。その尺度の一つに、「速い」という言葉があります。やはり、速いことが今は大事なんですけど、速いって、やはり大事で、いいというふうに言い

切れるのかな。

会場C：ぱっとやって、すぐ、できてしまうだけではなくて、そこに、もっと迷いとか、試行錯誤とかはあってほしいな、なんて。

林：「まだやっているの？」というような姿も、いいのかな。

会場C：はい。それが一番価値のあるものなのかなって。

林：こうやって考えていくと、我々が、普通、社会に求める「速い」ということだって、いや、ちょっと待てよ、教育の場では、速くなくてもいいことってあるぞ、ということですね。うっかりすると、私たちは、速けりゃいいというふうに思ってしまうんですね。

本屋さんに行くと、「速くできる～」という本がたくさん平積みになっていますね。それと同時に多いのが「分かる～」という本なのですが。「分かる」というのは大事なことです、じゃあ、分かればいいのかというと、どうでしょうか。

会場D：今、ぱっと出てこないのですけれど。今日、「どうしよう」と言っていた子がいて、・・・・・・。

林：さっき私が言った、分からないを楽しんでいるような姿ということですね。「もう分からない」「どうしよう？」と悩んでしまっているのが、なんか楽しいぞというふうに考えられるようになっていくと、これもまた、子どもたちにとってはエネルギーになりそうですね。私たちは、上手とか、速い、うまい、分かる、できるということを目指しがちだったなと思います。目指して悪いことは、もちろんありません。そうしないと追いつけないことがあったり、処理できないことがあったりします。でも、そうではない部分にも価値があると。全部、この対義語ですね。「うまい」に対して「下手」にも何か価値があるだろう。「遅い」も、うーん、重要かもしれない。「分からない」も、楽しいかもしれない。「できない」ということが大事な部分も出てくるかもしれない。我々が求めがちな、よい授業ということも含めて、その辺のところに問い直しをしてみる、疑ってみることを。ちょっと考えてみるといかがかなと思います。

「意味」や「価値」という言葉は大事に使いたいと私は思っているので、ここで問い直しをしてみたいと思って挙げてみました。先ほど、目指す子どもたちの姿というもの、自分なりの意味や価値をつくり出す子ども。図画工作や美術科の見方・考え方は、全教科の中で唯一、「自分なりの意味や価値をつくり出すこと」が、その見方・考え方の一つとされるという解釈になりましたね。学習指導要領の中で、そうになっています。そのように意味や価値をつくり出すことが、図工・美術は価値をつくるという文末になっている。これを私たちは大事に考えたいと思います。他教科にはない見方・考え方の一つが、この「意味や価値をつくる」ということになっています。「私の今日の授業は、意味や価値を子どもたちと一緒に作り出していたかな」、「何かをやらせていただけたかな」というように自問をする場面もあっていいかもしれないと思います。

さらに、「触れ合い」。でも、触れ合うことをこれから避けなければならないと考えていくと、じゃあ、「触れ合い」ってどういうふうに捉えたらいいのだろうかということにもなるわけです。「触れ合えないね、だから、これはできないね」というだけではなくて、それは悪いことなんだろうかと考えてみる。いかがでしょうか。

協働についても、どういう協働がいいのかなという問い直しが必要です。それから、研究テーマにもなっている、ネットワーク。どういうネットワークだったらよいのか。がんじがらめのしがらみだってネットワークです。でも、それはたぶんネガティブですね。では、どういうネットワークだったらよいのか。単に、つながっていればいいのか。ウェブのように、網の目のようになっていればいいのか。これも、私たちは疑っていいと思います。行政の立場の方々は、もっと違った観点でのネットワークづくりなどを真剣に考えないといけないと思いますが、我々は、ちょっと待ってと。そのネットワークって、そういうネットワークじゃないほうがいいのか。そのネットワークは、今は必要ないとか。そうやって考えてみることを是非したいと私自身は思っています。これは、「問い直し」のことです。

次に、「翻訳」についての話をしたいと思います。翻訳、これは辞書的な解釈で結構です。翻訳とは、他の言語を自国語に言い換えること。これが、翻訳の最初の意味です。たいがい、そういう辞書的な解釈になっています。私は、こんなふうに捉えられるのかなと思います。まずは、「自分の言葉での他者理解」なんだろうと思います。自国語にトランスレーション（translation）するので、それは自分の言葉ですね。今日の授業でも、授業者の先生と、児童・生徒の皆さんとのやりとりや子ども同士でのやりとりがありました。「うん、そうだね」というのは、相手が言ったことを自分の頭の中で解釈して、自分の言葉で応答しています。つまり、「自分の言葉による他者理解」のはずです。これも、いいとか悪いではなくて、たぶん、そういうことなんだろうなと思います。どんなに

相手のことを分かっているように理解しようとおもんばかっていたとしても、言葉を編んでいくのは自分ですから、自分の言葉で他者理解をしてみることになります。これをまず、大事にかみ砕いていきたいと。

そして、さらに翻訳していくと、「相手の立場で自己理解」をしているのではないかというふうにも言えます。相手の立場に立って、今、俺がこうやって言っていることは、どういうふうに伝わっているのだろうかと思う。ちょっとややこしくなってきますが、ベタに考えるということなんでしょうか。これは、翻訳しながら、実は自己理解をしているのではないかというふうにも言えると思います。「ああ、分かった分かった」と言うときに、実は、そうやって「分かった分かった」と受け流している自己理解なのか。そういう私、自分だと思ふのか、少し相手のことを分かってあげようとしている自分なのかとか。そういった意味でも、翻訳って、他者理解でもあり、自己理解にもなっているのではないのかなと思います。この私のプレゼンは、分かりにくいかもしれませんが、「何か、林は言おうとしているんじゃないかな」と、皆さんで翻訳してください。そうやって他者理解とか自己理解をすることは、他者、異文化の刺激を受けながら、自分が拡大、変容していくのではないのかというふうに思います。「おまえの言ってること意味がわかんない」と言って、拒否してしまえば、そこで思考停止になってしまいますが、「えー、分かんないけど…」と言っているとき、たぶん、自分が大きくなっているのだと思います。

先ほど、分からないというのは悪いことなのかというと、そうでもないというのは、こういうところでも伝わっていくのではないのかと思います。分からないときこそ、他者、異文化の刺激を受けているときとか、自分を大きくしようとしているとき、というように解釈できるかもしれない。

そして、分かんとか分からないを越えた未知の領域への想像力の発揮になってくるのではないか。翻訳をすることは、例えば、英語を読んで日本語に直していくということであるのだけれども、今、目の前にいる子どもが言っていること、机間巡視で先生方が一生懸命捉えて、つくり上げて、それに対して答えてあげるといような場面に、こういったことが行われているのではないかと思います。

それは、言葉だけにならないんです。ここが図画工作や美術のいいところで、今、あの子が持っているのは彫刻刀だ、そういう状態を見たときに、あの生徒は何をしようとしているのかなと、こちら側で想像する。そうやってたら翻訳になると思うんです。だから、今は黙って見ていようとか、今は、こう言ったほうがいいかなと、相手の立場に立った言葉でちょっと伝えてあげることができるといいのかなと。授業の場面では、このことがうんと必要になってくると思います。どうして、この子はここを青で塗ったんだろう。あの子は、何でここを毛糸でつないだんだろう。そういうことです。

どうして翻訳にこんなに興味を持ったのかというと、「ロスト・イン・トランスレーション(Lost in Translation)」というフレーズがあるからです。同名の映画(ソフィア・コッポラ監督 2003 年)もありました。私は観ていないので、ぜひ観ないといけないなと思っていますが、東京に訪れたアメリカの俳優をコミカルに描いたものです。直訳すると、「翻訳することで失われるもの」という意味です。例えば、さっき通訳がこう言ってくれたけど、あの人たちがあんなに笑っているということは、それ以外の意味もあるんだろうと、主人公が疑う場面がありますが、これが Lost in Translation です。

そうやって興味を持っていたら、“LOST IN TRANSLATION”という絵本がありました。今日、持ってきました。『翻訳できない世界のことば』という本ですが、手に取ったり、読んだことがある方はいらっしゃいますか。素晴らしいですね、お二人いました。では、ちょっと紹介したいと思います。

「翻訳できない世界のことば」というふうに訳者が翻訳してしまったのが、もったいないなと私は思っています。原書のタイトルは“LOST IN TRANSLATION”で、「翻訳で失われてしまうもの」という意味です。

ちょっと脱線しますが、ロバート・フロストというアメリカの詩人がいます。詩(Poem)とは、「翻訳して失われるもののことである」と述べているのです。翻訳して失われる部分が詩なのであるというような言葉を言っているのですね。おお、いいなと思いました。でも、ノーベル賞を受賞したロシアの詩人、ヨシフ・ブロツキーは、それとは正反対のコメントをしています。「詩とは、翻訳において得られるもののことである」と。逆ですね。あんなに言葉を研ぎ澄ませていって出来上がる詩というものが、翻訳によって失われるものと捉えるのか。翻訳によって得られるものであると捉えるのか。全然違うのですが、どちらも、いつも心に留めておきたいと私は思っています。

この絵本『翻訳できない世界のことば』ですが、ここには翻訳が難しい世界の言葉が載っています。例えば、こんな言葉です。モンガータ(MANGATA)、スウェーデン語です。水面に映った道のように見える月明かりのことを一つの単語で表す、そういう国なんですね。MANGATA と言うと、そういう景色を皆が思い浮かべられ

る。こんなものもあります、グルファ (GURFA)、アラビア語です。片方の手のひらに載せられるだけの水の量、それを単語にしている国がある。アラビアだからなのでしょうかね、片手ですくえるだけの水の量が、GURFAという言葉になっている。日常的には、慣用的に「どのくらい食べるの?」「うん、GURFA でね」なんていうふうに言っているかもしれませんね。ピサンザプラ (PISANZAPRA)、マレー語と言われています。数を数えるというか時間の単位です。バナナを食べるときの所要時間、それがマレーの人々にとっては、PISANZAPRA という言葉になっているわけです。これも翻訳できない。これはどうでしょうか、すてきな言葉です。ムルマ (MURR-MA) (ワギマン語)。足だけを使って水の中で何かを探すこと。この行為に言葉があるという。逆に言うと、この言葉を我々が知るときには、それだけの言葉を費やさなければいけないのですが、たぶん、現地の人から我々が受け取る意味というのは、どこかに落としてしまっているところがある、Lost in Translation があるということだと思います。これもいいな、イヌイットの言葉です。イクトゥアルポク (IKUTSUARPOK)。誰かが来ているのではないかと期待して、何度も何度も外に出て見てみる。これが一言の単語になっているんです。

世界各国の面白い言葉がありますが、日本語も4つ選ばれていました。一つ、紹介します。ボケット (BOKETTO), これは、今度は我々が翻訳する、相手の立場になって考えることになります。我々は、「あの生徒、ボケットしてるよ」と「ボケット」という言葉を使いますが、これを日本語を使わない人が訳すときには困るわけです。これだけの言葉、これは詩的に表していますが、「何も特別なことを考えずに、ぼんやりと遠くを見ているときの気持ち」。こんな気持ちなんだよ、ボケットというのは、と説明をすることになるわけです。

そのほかに日本語であと3つ選ばれています。これから本を読まれる方もいると思うので紹介はしませんが。私だったら、ここに「ZUKU」という日本語を入れたいなと思います。「ずく」は標準語だと30歳過ぎまで思っていましたので、いい言葉だなと思います。でも、これを他県の人に伝えると、ぼろぼろと言いたいことが落ちていくんですね。その気持ちとちょっと違う。「じゃあ、こういうこと?」、そうじゃなくてさあ、こうしたくなるっていう、もうちょっとここ、みたいな、そういう気持ちなんだよというのを付け加えていかないと、どうしても取りこぼしが出てきてしまう。Lost in Translation の場面ということなんです。

これは、子どもたちが言っている言葉が我々にどう伝わっているのかというふうに置き換えて、皆さんが翻訳して聞いてください。そういうことなんです。このように「翻訳」、子どもが言っていることを我々はどれくらい翻訳できているのかと置き換えると、もうかなりの Lost in Translation があるんだろうなというふうに、私などは反省してしまうわけです。こういうことから考えていくと、「相手を分かるって、どういうことなのか」という問いになります。相手の言っていることが理解できればいいということではあるのですが。

そこで、もう一冊持って来ました。皆さん、この本はご存じでしょうか。『ぼのぼの』です。もう25年ぐらい前から刊行されている、いがらしみきおのコミックですが、第1巻を持ってきました。この中の69ページが、私には、ずきーんと来るんですね。これを紹介したいと思います。

『ぼのぼの』をご存じの方はいますか。さすがに多いですね、よかったです。4コマ漫画が、たらたらたらつと続く。4コマ、4コマ、4コマでお話が進んでいきます。69ページ、こうなっています。

ラッコのぼのぼのちゃんが、いつも食事をするときに、胸の上で、カンカンと貝を割っている石。あるとき、ポケットから落として、パリンと割れてしまったんですね。そこで、代わりの石を探しに行くというエピソードのなかの場面です。ぼのぼのといじめっ子のアライグマちゃんと、いつもいじめられているシマリスちゃんと3人で、代わりの石を見つけに入り江まで行きました。そこで、ある程度、石は見つかりました。ぼのぼのは、幾つか石の候補を見つけたんですね。

アライグマくん：「おまえなあ、結局、どうなんだよ。この石も、この石も、ほんとに全部いいと思ってんのか」

ぼのぼの：「うん、僕はどの石も好きだけど…」

アライグマくん：「どの石も好きだけど？ 何だ？」

ぼのぼの：「どの石が僕を好きなのか、分からないなあ」

このあと、間があってアライグマ君が怒り出しちゃう。この「どの石が僕を好きなのか」という言葉というか、このシチュエーションは、普段の生活では、なかなかないのではないのでしょうか。相手がどう思っているのだろう、と思い巡らす。とりわけ、相手が人間ではなく、このように石であっても、です。どうにかして相手とわかり合いたい、でもわかり合えない、という気持ちがズズンと伝わってくるのです。

この「わかりあえなさ」について、今、まさにこれをテーマにした展覧会が開かれているのです。「トラNsれ

ーショ Ns (トランスレーションズ) 展」です。2020 年 10 月 16 日から 2021 年 3 月 7 日まで、東京ミッドタウンにある「21_21 DESIGN SIGHT」で開催されています。僕はまだ観てないので、コロナが落ち着いたら、是非行きたいと思っています。行けるようになるでしょうかねえ(＊)。

私たちは、たぶん多くの「わかりあえない」ことのなかで「わかりあう」ことを願って模索しているのです。その時に重要なのが他者をわかろうとすること。これは行為で言うと「想像する」ということだと思います。相手が、今、どんな気持ちなのか。眼の前の子どもが、今、どんなことを考えているのか。限界はあると思いますが、私たちはここに「想像力」を発揮させたいし、その力を鍛えたいと思います。」

これが 2011 年の講演のときにもお話をした「想像力」の、今の私が考える話、「想像力」の問い直しです。

こうみていくと、「分かり合えない」ということ、これはとても大事な現象であると思えてきませんか。それから、「分からない」ということは、どうも、そんなにネガティブなことでもなさそうだ、何かここから生まれそうだなという予感もしませんか？ 図画工作や美術の授業や活動で、この「わかりあえない」「分からない」ということの「面白さ」を具体的に感じ取ることができるかも知れません。みなさんの小中学校でも、姉妹都市提携の学校があったりするでしょう。そういう学校の先生と連絡を取り合って、オンラインでやりとりするという、伝言ゲームみたいなことを図工や美術の授業で始めても面白いと思います。

こっちの子どもが「じゃあ最初に、画用紙の真ん中あたりに丸を描いて」と言うと、向こうの子どもたちは「えー、マル？ どんな丸かなあ。」「次に、こういう色を塗って」とか指示を出して、向こうで Lost in Translation が起こっていった、とんでもない絵が出来上がってくる。それを見合って、伝えるって面白いねとか、難しいねとか、そんなようなことを感じ取ることも、オンラインだと面白いことになります。伝わらない面白さというの、もわかるかなと思います。これは遠くでなくても、近くの人とやってみるのもいいのではないかなと思います。

私も現場にいたときに実際にやってみました。クイズ仕立てのエンターテインメントとして図工の授業をやったことがあります。『鑑賞、勘 SHOW (かんしょう・かん・しょう)』って変な言い方ですが、鑑賞するんです。まず、教室の半分の子どもたちが、ある絵を鑑賞します。グループ分けしておいて、各グループの半分の子が、まず絵を見るのです。その鑑賞した感動を絵を見ていない自分のグループの他の子どもたちに伝えるんです。「こんなふうだったんだよ」「ここ、こんなふうだね」と。そうすると、見てない子どもたちが「おお？ こんなふうだったのかな」と、それを翻訳して絵にしていくんですね。そして、一斉に見せ合う。そうやって、見えないこと、伝わらないことを楽しむこともいいのではないかなと思います。

言葉が通じない人とのやりとり。こういうときこそ、図工・美術でやっている造形的なやりとりが生きてきますね。言葉がなくても、色とか形で、いろんなやりとりが、「おお、できるじゃん」と。言葉が通じる人とやってもいいんですけども。そのようなことも、我々が逆境に思えているときこそ、ほかの教科ではできないことが大いにあるような気がします。

最後に、図工・美術を通した教育を再確認したいと思います(写真7)。

先ごろ、群馬大学共同教育学部附属特別支援学校で行われた図工の授業で、3年生、4年生、5年生の子たちが段ボールでつくる「あったらいいな、こんなおうち」というタイトルの活動をしました。

背中が見えている男の子は、本当に小柄で、視力もちょっと弱く、言葉もぼんと出てこないというようなお子さんです。最初は、手に載るぐらいの段ボール箱を、ごしょごしょとやっていたんです。でも、担当の先生が用意した、いろんな大きさの段ボールに触れていったら、どんどん積み上げることが面白くなって。また、切り込みにいろいろ差し込んでいくのが楽しくなってきた、まだ握力も小さいものだから、先生と一緒に、「どこを切ってほしいの?」「そこを一緒に切ろうね」と、段ボールをギーコギーコとやって、その後、はめ込んでいくんですね。そんなことをやっているところです。

全部で3週間、授業を6回行ったのですが、前半2週間の4回で、この子は大きく変わりました。本当はいろいろできる子だったのかもしれませんが、言われないと図工に参加してこなかった子が、4回目から、どんどん自分でやるようになって、

図工美術を通した教育の再確認

図画工作・美術の時間は
見栄えのよい作品を描いたりつくったり
するための時間ではない。
「表現及び鑑賞の活動を通して」行われる
人間を育てる教育の時間である。
「できる・できない」
「わかる・わからない」
「ふれる・ふれない」
「いっしょ・ひとり」...で育つ時間。
私たちは、そんな子どもたちに、培う時間。



写真 7

自分で箱を持ってきて組み立てていくというようになったと担任の先生が感動していました。

この機会に授業チームの先生方に伝えたのは、「上手にできたね」というような言葉で評価をするのではなくて、「すごいね、大きくなったね」とか、その子がやっていることを、そのまま先生の言葉にしてあげることを大事にするというよいということです。「へえ、今、段ボールを差し込んでいるんだね」。やっていることを先生が見てくれて、それを言葉にしてくれたのは、たぶん子どもたちにとしてみると、とても自分のエネルギーになっていると思います。使っちゃだめですよというのが「上手にできたね」という言葉です。

見栄えのよい作品をつくるという言葉と合致するのですが、図工・美術の授業をしていて、子どもたちの作品を評価するときに、単純に「おお、上手だね」「うまいね」というように声をかけがちですね。私は、この言葉は使わないように心掛けています。「上手だね」という言葉は、確かに技巧的に高い子どもには、また別の言葉で称賛するのですが。「上手だね」は、子どもからしてみれば外部の評価です。外側に尺度がある言葉になります。「○○ちゃん、上手にできたね」と、幼稚園の先生などはよく使っていますが、どうかと思います。こうやってやると「上手だね」という褒め言葉がもらえる。子どもは喜びますよ。でも他者のスケール・尺度によって自分を評価してもらい、そのことに小さい子どもたちが慣れていってしまう。だから、上手にできないといけないというふうに、だんだん思っていってしまう。

そうではないんです。自分がやりたいと思ったことをやれることがとても大事なことだと思います。「僕がやりたいことは、これだ。」これが、「上手だね」ではなくて、「○○君、差し込んだね」と言われれば、○○君はうれしいわけです。僕、差し込みたいから差し込んでいる、先生がこうやって見てくれた。「高くなったね」「テープ、ここに貼ったんだね」と、その子がやったことを、まずは、そのまま追従するかのようにはトレースして言ってあげる。子どもたちが何かやったときに、そのことをまず認めるような声掛けが最初に口から出るといいなと思います。

「見栄えのよい作品を描いたり、つくったりするために、図画工作や美術の時間はあるのではないよ」、という話をします。授業で学生にそういう話をすると、学生は「えっ」と、そういう感覚の顔をします。そうじゃないんだよと。先ほどの会長先生のお話にもありましたが、この研究大会のテーマでもある、表現および鑑賞の活動を通して教育が行われているということなんです。皆さんはもう、そういうことを十分認識されていると思いますが、あえて、ここで重ねて言わせてください。

こうやって考えていくと、できる、分かる、触れる、一緒、で育つ時間でもあるのだけれども、その反対語、アンチテーゼである、「できない」「分からない」「触れられない」「一人」、これでも育つ時間であるというのが図画工作や美術のいいところだと思います。この考え方で我々は子どもたちに寄り添っていったらいいなと思います。「培う」とは、「養う」、栄養を与えるという意味とちょっと違って、伸びようとしている若木の根元に土を寄せるというのが原意です。ですから、育とうとしているところに土を寄せてあげるという仕事。栄養ばかりを与えても駄目なんですね、培う、そういう時間になるといいなと思います。どんな子どもに育てたいのか、どんな青年に育てたいのかということを問い直して授業に臨まれるとうれしいなと思います。

私は大学で学生に彫刻と図画工作を教えています。彫刻を教えるときに、彫刻のつくり方は教えないとできない部分がありますが、木の塊に向かって行って、学生たちはみんな疲労困憊するように試行錯誤して、うまくいかないという状況で、よい作品も成果物として結果的には出てくるかもしれないけれども、仮に、その成果物、作品が出てこなくても、その場で行われている、今日もキーワードが出てきましたが「試行錯誤」とか、「行きつ戻りつ」とか、そういった姿を大事にするようにしています。彫刻のつくり方を教えているのではなくて、彫刻家を育てるということよりも人を育てているんだという自負によります。そのときに、作品ができればいい、絵が描ければいいではなくて、今日、授業を行ったこの子どもたち、この小学生や中学生が、10年後に、こういう人になってほしいから、今日、この授業をやったんだ。そういう気持ちでやってもらいたいなと思うんです。それがわかる教師を育てたいのです。

今日の中学3年生の授業は迫力がありました。ごりごりごりっと彫刻刀で彫るとか、ローラーでどうやってやろうかな、生徒の言葉がよかったですね。「違う、この色じゃない」とか言っていました。あれっていいなと思うんです。人が育てているなあ。ああやって、自分がやったことを「違う、こうじゃない」とやり直していくことは、10年後に、そういう青年になっていくということです。こう考えていくと、図画工作や美術の時間は本当に人を育てる時間になるのではないのかと思います。図工・美術ならではの授業、評価、価値や意味を再確認していただけるといいなと思います。

そして、それを担うのが、美術教育を担っている先生方です。私も一緒に、3・11、この COVID-19、こういう状況の中を、一緒に乗り越えるというか、その中を漂いながら進んでいきたいなと思います。

渡邊委員長先生の最初の挨拶にあった、木下紫水の自由画教育運動、まさに 100 年前に、この下伊那で起こっていた。皆さんもお分かりのとおり、その後、戦争という予期せぬ事態になった。つまり、こういうコロナ禍のような状況になり、それが実現不可能になって、また臨画に戻るというようになってしまいました。でも、木下紫水の自由画教育運動の考えが今も我々の心にあるということは、ちゃんと生きているということです。だから今、私たちが考えている大事なことは、コロナ禍であっても、たぶん残っていくはずで、残さないといけないと思います。そのときに、じゃあ、何を残したらいいのか。何が大切なのか。それを問い直すときではないかと思います。

話したいことは、まだまだたくさんありますが、この辺でお話を終わりにしたいと思います。図画工作や美術という教科、すてきなんだよねという軽いキャッチフレーズではなくて、「いやあ、これはやっぱり大事なんだよ、何とかしなきゃいけない」というような感じで、また一緒に頑張っていきましょう。今日は、どうもありがとうございました。

＊ 追記：

林は、「トラ Ns れーショ Ns (トランスレーションズ) 展」を 2021 年 2 月下旬に意を決して観に行ってきました。「わかりあえなさ」をわかりあうことから、様々なアイディアや行動が生まれるということが、ユニークな視点や方法で示されています。本講演で紹介した『翻訳できない世界のことば』も展示されていました。是非、(可能でしたら) 行かれることをお勧めします。尚、会期が、2021 年 6 月 13 日(日)まで延長になりました！